

国際ボランティア活動－3年間の実績評価と展望

中 村 恭 一 生 田 祐 子 山 田 修 嗣

International Volunteerism: Assessment of Three-Year Practice and Future Prospect

Kyoichi NAKAMURA, Yuko IKUTA, Shuji YAMADA

Abstract

The purpose of this study is to review three-year practice of international volunteer projects developed by the Faculty of International Studies, Bunkyo University. Three major projects in Kosovo, Bosnia, and East Timor, launched by Professor Nakamura, are examined and evaluated from the following perspectives: significance for students' self-development, needs analysis of students' English communication, and self-evaluations by students who participated in each project. The future prospects of international volunteerism in the Faculty are also discussed.

I 国際ボランティア活動とその意義

1 国際協力の最前線

文教大学国際学部における国際ボランティア活動は2001年に始まった。

きっかけはこの年の春、元国連職員であった私（中村恭一）が同学部国際協力論担当として赴任したことである。国連平和維持活動をはじめ、国連による平和の回復や復興及び開発支援の活動を世界の各地で見てきた私は、いわゆる NGO 活動も世界各地で接した。特に99年のコソボ紛争終結後の国連によるコソボ復興支援の最前線で国連職員として活動した私が目にした NGO の献身的な活動は、ことのほか印象的だった。80万を超えるアルバニア系コソボ住民が難民となって国外脱出したかと思うと、NATO 軍空爆でセルビア治安部隊による弾圧の危険がなくなると、難民たちは先を争って帰還した。その時彼らが発見したのは、焼け崩れた廃墟のような我が家だった。国連が現地に国連コソボ暫定行政機構（United Nations Interim Administration Mission in Kosovo=UNMIK）を設立し、これら帰還難民の救援に取り掛かる体制を整えたのは空爆終結から2カ月もたった8月の半ばだった。その時私はニューヨークの国連本部から現地に派遣された。しかし世界各国から集まった NGO はすでに活発な支援活動を行っていた。その中にはいくつもの日本の NGO も含まれていた。海外での本格的な復旧救援活動は初めてという組織もめずらしくなかった。日本の NGO 活動の大半は青年たちによって担われていた。

“顔の見える国際協力”が叫ばれて久しい。国際機関や関係国政府に対していかに強力な財政支援

をしても、それが日本からの援助であることを当該国民に認識してもらうのは難しい。1990年に発生したイラクによるクウェート侵攻を巻き返すために始められた91年の湾岸戦争において、戦争終結後クウェートが米ワシントン・ポスト紙に掲載した支援国に対する感謝の意見広告は、多額の財政支援をした日本を無視した。目に見える国際協力が声高に叫ばれる大きなきっかけとなった。

国家レベル、政府レベルでは日本の自衛隊による国連平和維持活動への参加が本格的に議論され、まもなく国際平和協力法が成立したのを受けて、1992年には自衛隊史上初めてカンボジアにおける国連平和維持活動（PKO）への参加となったのは周知のとおりである。以後紛争後の復興過程における国連 PKO への自衛隊の参加は日常化した。

一方民間レベルでも80年代を通じて開発における国際協力活動に対する関心は高まりつつあった¹。1984年におきたエチオピアにおける大干ばつに続く飢饉に対してかねてから国際緊急支援活動に携わっている欧米の NGO 活動が広く報じられたことも大きく影響した。80年代半ば、カンボジアの難民がタイに流れ込んだのを受けて、日本にもタイのカンボジア難民を支援する NGO が組織され、青年たちの目をひきつけた。青年たちは、国の内外の一般市民の苦難には敏感である。しかしいざ支援行動となると、自分に行動の方法と場所が見つからない。青年たちの意識を目覚めさせ、行動に導くにはそれ相応の手助けが要る。国際学部とは、そのような国際協力を実践する人材を育てることが重要な柱の一つだと私の目には映っていた。医学部では患者を治療できる医師を育てること、教育学部では教壇に立って教育を実践できる先生を育てることだとすれば、当然国際学部は国際協力活動を実践できる人材を育てる場と考えることができる。

2 紛争地でのボランティア活動

着任早々私は学生たちに国際協力の現場に立つことに対する関心を探った。問いかけは簡単だった。「夏休みにコソボに行って、紛争後で困っている人たちに何か役立つようなボランティア活動をするに関心はありますか」

このわずか50字余りの言葉の中に、学生たちを刺激する言葉がいくつか含まれていたが、その時私はそういうことにはほとんど無意識だった。なぜなら私の国連における日常生活の中では、これらはなんら特別な言葉ではなく、毎日普通に使っていた言葉だったからだ。“コソボ”、“紛争”、“困っている人たち”、“ボランティア活動”－ 学生たちはこうした言葉には無縁の日常生活であったためか、こうした言葉は十分に刺激的だった。

2001年春、私が学生たちに初めて問いかけた時、それはコソボでの NATO 空爆からまだ2年しかたっていなかった。早春の冷たい雨の中の山道を逃れていく難民の姿や紛争終結後炎天下の道を帰還していく難民の姿、国際社会が復興支援に乗り出している様子は、マスメディアを通じて学生たちにもおなじみの光景だった。「コソボでボランティア活動が出来る」。学生たちの言葉を借りれば、「ウソー！ ホントニ？」であり、「ホントニ」だと分かった、「私、ぜひ行きたいです」という反応に変わった。打診した私は、国際紛争問題を専門に勉強しようとしている私の3年生のゼミ生2、3人が参加希望かと思っていたのが、正直なところであった。しかし参加希望を表明した学生は私の授業の受講生20数人に上った。約30万円の自己負担費用、あるいは民家を借りて自炊する活動であることを

¹ 日本でも市民運動としての国際舞台での NGO 活動は1972年にまで遡ることが出来る。この年ストックホルムで開かれた国連人間環境会議には世界中から多くの環境、人権 NGO が参加し、日本からも水俣病患者支援者団体などの NGO が参加して、活発な活動を行った。さらにもっと遡って1955年に始まった原水爆禁止運動は日本の国際 NGO 活動の原点とも言える。

説明した後でも、参加希望者が減ることはなかった。

「いまどきの若者」の意識の高さと熱意に、私は胸を打たれた。私が見てきた欧米やアフリカ諸国では、ボランティア意識が高い。しかし日本の学生にこれほど関心が高いことを知る機会は余りなかった。この関心の元にあるのは、日本の NGO 活動が盛んになり、またそれが広く報道されるようになったことが手伝っていたことは間違いない。また阪神淡路大震災におけるボランティア活動の高い評価も若者たちの心を揺さぶっていたことは確かだろう。

文教大学国際学部、特に国際関係学科を志望して入学してきた学生たちは、潜在的に国際 NGO による国際舞台での活動に大きな関心を持っていたと言える。タイにおけるカンボジア難民救援活動などの先例はあるものの、国際紛争に多くの日本の NGO が本格的にかかわり始めたのは、コソボ紛争からであることから、コソボ紛争が“日本の国際 NGO 活動元年”と呼ぶ人たちもいる。

“困っている人たち”に何か役立ちたいという意識は、「今時の若者」たちにも相当に強いものであることを、私は大学教師になって自ら確認した。しかし学生たちの熱い反応に対して、学生の家族や大学関係者の関心は別なところにあった。「そんな危険な所へ行って大丈夫ですか」。以後私は多くの人たちからのこの質問に答えなければならなくなった。私にすれば、困っている人たち、支援を必要とする人たちがいる限り、少々の困難や危険があっても出かけることに躊躇する理由は見当たらない。新聞記者として10数年、国連職員として10数年を過ごしてきた私にすれば、困難も危険もないところならば、困っている人がいないところということにもなるし、国際協力の必要のないところということになる。紛争地を訪ねずには紛争問題や復興問題を論じることが難しいのは、人類学者が現地人社会に入り込まずに研究するのはほぼ不可能であり、ゴリラの研究家がアフリカの山中に住み込まずには調査ができないと同様である。

しかしいくら紛争問題を専攻しようとしている学生であっても、また成人式を済ませている学生であっても、無謀な危険に学生をさらすことが許されないことも確かである。問題は明らかに危険な地に無謀に臨むことと、慎重な状況把握と準備の上で大胆に挑むことの違いを認識できるかどうかである。

3 可能性に挑む

この小論は、学生による国際ボランティア活動の可能性と問題について、多くの関係者に考えてもらう一助にするためのものであり、したがって率直にこの問題を論じなければならない。

まず「そんな危険な所」という問題である。紛争地は間違いなく危険である。紛争中はもちろん、紛争後も多くの人々が殺傷される。だからこそ国連平和維持活動、あるいはコソボに見られたように、NATO 軍を中心とした国際軍による治安維持活動が必要となる。ことコソボに関して言えば、私が勤務した最初の1年間、犯罪行為により命を落とした犠牲者がほとんど毎月20人を超えた。それがマスメディアによって世界に報道され、紛争終結後も「コソボは危険」というイメージは人々の心に強く焼き付けられた。しかし現場にいる国連や NGO の職員はもうひとつの事実を体験的に確認している。つまり紛争の本質とかかわるような危険は、特定の当事者にのみ関係することであり、十分に注意することにより当事者になることを避けることができるという事実である。紛争地と言えども、混乱の本質が明確な場合と、ただその地域社会が無秩序に混乱している場合という二つがある。コソボの場合は明らかに前者で、連日のように殺傷されたのは、NATO 軍の攻撃以前はアルバニア系コソボ住民であり、危害を加えるのはセルビア軍治安当局や、民族浄化の先頭に立つ過激な民兵組織だった。NATO 軍の空爆が終わりコソボ全土に国際軍が展開されると、殺傷されたのは居残ったセルビア系や

ロマと呼ばれたかつて弾圧する側にあった民族であり、襲撃犯はアルバニア系過激分子だった。NATO 軍の展開前も、ヨーロッパ諸国から派遣された2千人のコソボ検証団（Kosovo Verification Mission=KVM）職員が各地に展開されたが、大きな問題はなかった。ほぼ同時に大きな混乱を経験し、国連が本格的な活動を展開した東チモールにおいても同様である。当該地において対立する民族あるいは勢力間において大きな犠牲が出て、国際的な人道的活動家が直接攻撃対象になる状況というのはかなり鮮明に分別できる²。つまり「危険な所」というのは事前にかなり察知できるということである。2003年夏国連事務所や国際赤十字事務所が爆破されたバグダッドに見られるように、国連職員や NGO 職員の文字通りの命がけの活動現場というものはかなり明確に選別できる。そういう場に学生を立たせることは無謀という他はない。

しかし私にとって答えに窮するのは、「大丈夫か」という日常的にごく普通に使われる言葉である。私は決して詭弁ではなく、この世の中「大丈夫なところはどこもない」とこれもまた経験的に確認している。国連の私の同僚であった人権問題の専門家だった久保田洋氏は、1989年ナミビア独立の直前行われた選挙監視活動に参加するためにナミビア内の担当地に向かう途中自ら運転する国連の4輪駆動車が道路脇に横転、若い命を落とした。私がナミビアを訪れてしばらくしてからのことだった。ジュネーブからの長旅の疲れ、延々と続く一本道。それを数百キロ運転して担当地に向かうというのはある意味では大変危険な作業である。しかしそれはナミビアの危険と直接関係するものではなく、長旅を急がねばならない国連職員がしばしば直面する危険である。したがって「大丈夫か」という問いには、率直に「大丈夫なことなどない」と答えざるを得ない。と同時に、ボランティア活動に赴く学生はこのような危険を避けることは十分に可能である。それでも交通事故に遭うことは世界中どこにいてもあり得る。あるいは夜道後ろから来た何者かに殴られて金品を奪われるというのも、日本のすべての街においても起こり得ることであることを思うとき、「大丈夫な地はどこにもない」と言わざるを得ない。

多くの紛争地においてももちろん強盗、窃盗に遭遇することめずらしくない。私自身もコソボで、自分自身の不注意のために、路上駐車した車の中のバックパックを一度ならず二度も盗まれた経験がある。いずれの場合もレゼパセ（国連職員用のパスポート）や日本のパスポート、カメラ、ヘッドランプなど常時携帯品が入っていた。もちろん車はまがいもなく施錠していたが、窓ガラスが破られた。生活困窮者の多い地で窃盗に遭うのは日常なことである。それを知る限り、「大丈夫か」と問われれば、「大丈夫なところなどない」ということになる。しかしそれとて、十分な注意さえすれば、つまり車内に所持品を残すなどという軽率な行為をしていなければ防げたことである。

4 人道的貢献の可能性

それでは学生による国際ボランティア活動は安全に実施できないか。

この質問に対する適切な答えは見つからない。先述したように時差を乗り越えた旅行や多少は時間と競争する活動のための疲れから、体調不良になる者は必ず出る。また食あたりや水あたりも絶対に避けられる手段はいまだ確保されていない。自らがいかに注意していても、レストランで出された食べ物が100パーセント安全だという保障はない。アフリカなどで活動する多くの国連職員は、当初マラリア防止のための薬剤を服用する。しかしそのうちその副作用を避けるため、あるいは服用のわず

² 紛争地において国連職員、国際 NGO 職員が犠牲になることは決して皆無ではない。コソボにおいても赴任直後の国際職員が殺害されたり、東チモール紛争で西チモールの難民キャンプで国際職員が武装集団に襲われて命を落とすなど、危険は状況は必ずある。

らわしさから服用を止める。そしてマラリアに罹患して治療のため現場退去という事態に遭遇するのはめずらしくない。私自身コンボ勤務中、動物性感染症と疑われる原因不明の肝臓疾患に襲われ、約3週間ニューヨークでの安静治療を強いられた。下痢に苦しんだり、熱射病に襲われたり、マラリアに罹患したり、原因不明の肝臓疾患に見舞われること、あるいは空港からのバスやタクシーが事故を起こすことを含めて安全性を問うならば、安全を保障できる活動は皆無である。

事実、文教大学ボランティアズとして活動に参加した学生たちの中にも、疲労により発熱したり、3日間に及ぶ下痢に襲われたり、赤道直下の太陽による火傷を負ったりする者は毎回出た。ダニや虫刺されなどによる手足の傷跡も絶えることはない。しかしこれらの体験はむしろ友人、家族たちへの格好の土産話となるものであって、学生たちに深刻な苦痛を与えるものにはならない。ボランティア活動を通して学ぶことは多いが、このように体調不良を体験することで、近代的なホテル住まいの観光旅行者には見えない現地の生活環境の厳しさも学ぶことになる。

それでは不測の事態にはどのように対処すべきなのか。これまでの事例を見る限り、旅行傷害保険という対応策しかないのが実態である。しかし保険とは所詮事後の金銭的慰めであって、失われたものを元通りに回復することはできない。ボランティア活動参加者が他者に安全保障を求める限り、ボランティア活動は成り立たない。この点が、国連や政府、あるいはNGOの職員として組織的に、あるいは制度の下で行う職業としての人道活動とボランティア活動とが大きく異なるところである。ボランティア活動は、あくまで個人の自由意志で限りなき人道的貢献の可能性に挑戦するものであって、強制されるものではない。強制されるものではない限り、個人は自分の意志による選択と行動に対する責任を一人担わなければならない。

大学が活動の場を提供する限り、大学が何らかの責任を負わなければならないか。法律上の責任論については、今ここで論じる術はない。しかし国連などが大学院生たちに提供するインターン制度に対応のヒントがあるように見える。国連ではニューヨークの本部をはじめ各国に所在する機関において、インターン制度を採用し、有意の青年たちに体験の場を提供している。しかしその体験の場を得るには、必ずひとつの条件が伴う。それは事故、事件等との遭遇を含む不測の事態に関しては、国連はインターンに対しては一切の責任を負わない旨の誓約書の提出である。

NGOにおいても、同様の措置が取られている。この慣行が広く認知され、当事者、家族、関係者に受け入れられるとき初めて大学生によるボランティア活動体験もまた可能になる。

「何かあったらどうするか」という多くの人の疑問と心配は、ひとつには大学関係者の責任問題に関係しており、もうひとつには大学という教育機関が持つ社会的責任に関係する。これまでの日本文化の中では当然だったかもしれない。しかしそれによって、人生観、世界観に大きな影響を及ぼすかも知れない貴重な体験の場となる海外でのボランティア活動の場を学生たちに与えることを躊躇するとしたら、それは学生にも、学生が在籍する組織にも大きな教育的損失にはなりはしないか。なぜなら国際協力、国際貢献というのは実践することによってのみ初めてその価値が生まれ、実践者になるには自ら見聞し、体験することによって増殖される意欲と決意なくしては不可能だからである。

5 文教大学国際学部学生の実践能力と将来の可能性

文教大学国際学部学生によって実施された海外ボランティア活動は2001年から2003年までの3年間で、5地域10回に及ぶ。(うち1回は夏の活動の準備を兼ねた視察)。これに参加した学生は総数39人に上る。うち11人は2回、2人は3回の参加を重ねている。参加時の学年は3年生時が多く、次いで2年時と4年時の順となる。

この体験を元に、大学卒業後国際協力活動のプロへの道を歩み始めたものは2002年度卒業生1人、2003年度卒業生が1人と決して多くはない。しかしもしその道に卒業後すぐに進むことが可能だとしたら、恐らくボランティア活動体験者だけではなく、国際学部相当数の学生がその道を選択したと思える。先に「国際学部は国際協力を実践できる人材を育てることが重要な柱のひとつ」と私が考える旨を記したが、その意味では、私は3年を経てなお目的を達成していないことになる。しかし意欲と目的意識はかなり育てられてきている。

例えば、山田修嗣講師が総括指導したボランティア活動体験のアンケート調査（別項参照）によれば、「活動に参加して、国際協力関連の仕事につきたいという気持ちについて、出発前と帰国後の変化はありましたか」との問いに、46.9%が「出発前も帰国後も、国際協力の関連する仕事をしたいと考えている」と答え、21.9%が「出発前は国際協力に関する仕事をしたいとは考えていなかったが、帰国後は考えるようになった」と答えている。68.88%すなわち3分の2の参加者が国際協力の仕事につくことを希望している。「出発前は国際協力に関連する仕事をしたいと考えていたが、帰国後は考えなくなった」と答えた体験者が9.4%というのに比べると、体験者たちの意欲と目的意識は揺らいでいないと言える。問題は、学部として、あるいは大学として学生の意欲を満たすことに成功していないという事実である。

しかしこれは決して大学側だけの問題だけではなく、社会の側に意欲ある学生に十分な機会を提供できない状態であるということでもある。もちろん学生自身に意欲あるいは目的を果たす能力にも大いに関係があることは否定できない。

国際協力分野における学生の卒業後の進路としては、通常次のような分野が挙げられる。国連等国際機関、政府あるいは国際協力機構（JICA）および国際協力銀行（JBIC）、開発協力コンサルティング会社ならびにODAに絡む開発協力を実施する総合商社、そしてNGOである。これらの機関での仕事は、開発あるいは緊急援助分野での専門家の職種であることから、ほとんどが大学院レベルで本格的な訓練を積んでいるか否かが問われる。そういう意味では、文教大学卒業生に国際協力専門家となっているものが少ない事実は、決して文教大学固有の問題ではない。

それでは大学院レベルで専門家となる訓練を受けた者、あるいは受けている者はどうか。その人たちが希望する分野の専門家として活躍できるチャンスはごく限られているのが現実だ。この事実は大きな社会問題である。なぜなら内外の高等教育機関で専門家が養成されながら、社会が十分な活動の場を提供できないからだ。国際協力を標榜する国が、十分な活動の場を提供できないとすれば、国際貢献も大いに限定されたものにならざるを得ない。ODAの有効な活用法をめぐって、人材の活用もまた論議される。しかし現実には人材の活用は決して十分ではない。政府、国際援助機関、NGO等国際協力組織、そして教育機関が、国際協力活動に携わりたい人材にどれだけ活動の場を提供できるかが、今緊急の課題となっている。

上述した文教大学ボランティアたちの活動は毎年活動報告書を製作して、その活動内容を詳述しているが、活動に参加した学生の現地での適応力ならびにボランティア活動体験が、英語学習、学生生活ならびに進路の検討にどのような影響をもたらしたかに関して、国際学部国際ボランティア委員会の委員である生田祐子助教授及び山田修嗣講師により、調査と検討が加えられた。以下はその分析と評価の報告である。

（国際ボランティア委員会委員長・国際学部教授 中村恭一）

II 国際ボランティア活動と英語コミュニケーション能力育成における課題

1 調査研究の目的

語学の習得には、動機付けが不可欠である。国際学部における国際ボランティア活動が学生の間で広がり、国際協力現場への進路を開拓する学生が増加するにつれ、学生たちの英語学習に関するニーズも目的を絞り具体化されつつある。つまり、英語圏での日常生活に関する英語コミュニケーション能力に留まらず、英語を共通言語として使用するグローバルな環境において、自己を開示し、人との関係を積極的に築き上げていくために、新たな視点での英語コミュニケーション能力の育成を図ることがこれからの英語教育の課題のひとつと考えられる。

2004年度に始まった国際学部の新カリキュラムの下で、ボランティア活動参加による単位取得が可能となり、学生たちのより活発な活動が予想される。2003年度には、UNDP（国連開発計画）の協力を得た文教大学生のインターンシップが始まり、今後長期に渡り学生を国際協力の現場へ送り出す機会が増えると思われる。特にインターン活動は、スタディツアーや体験学習に終わるのではなく、現場における実際の貢献度が学生自身の卒業後の進路を決定し、大学側にとっては継続して学生を送る機会を開拓する指針となる。そのためには、国際協力活動に応募する学生たちの事前知識教育と英語を中心とする外国語コミュニケーション能力の育成が重要な鍵となる。

2003年の春から夏にかけて、学生1名、卒業生1名がコソボ UNDP ヘインターンとして3カ月間参加し、夏休みには、4名の学生がボランティアズ（文教大学ボランティア活動チームの名称）として、コソボ、ボスニアに3週間滞在した。今回、共同研究の一環として、これらの活動を中心に、国際ボランティア活動の実態を英語コミュニケーション能力とその活動にかかわるための英語のニーズに焦点をあて、調査研究を行った。それを基に国際学部が今後取り組むべき課題を考察する。

2 調査対象

- a) コソボ UNDP（国連開発計画）インターン生2名：
 - 1 (M.M.)（国際関係学科4年生）
 - 2 (N.N.)（国際関係学科2003年3月卒業生）
 - b) 2003年度文教ボランティアズの学生4名
（2003年7月～8月にコソボ、ボスニアに滞在）：
 - 3 (H.S.) 4 (A.K.) 5 (K.M.) 6 (K.T.)
- * 番号は、以下の表で調査対象者を区別するために使用。
学生の氏名はイニシャルで標記するものとする。

3 調査方法：対象学生の英語コミュニケーション能力に関して

参加の事前と事後に英語能力の測定を、オンライン英語能力試験（CASEC）を用いて行った（表1）。同時に、事前準備状況として、それぞれの海外渡航歴、ボランティア活動歴について、事前に個人面接による聞き取り調査を行った（表2）。英語の運用能力については、事前に、英語によるインタビューを行った（表3）。

インターン生2名に対しては、現地での英語使用の状況を視察時に調査し、コソボ UNDP スタッフからインターン生の仕事内容と英語運用力について、聞き取り調査を行った。それに基づきインターンとして参加する学生に必要な英語力のニーズ分析を行った。在学生のインターン（M.M.）から

は、定期的な英語による電子メールでの活動報告を受け取った。

ボランティアズの学生4名に対しては、コソボ人権センター主催セミナーでの活動と現地関係者たちとのコミュニケーションの様子を中心に、英語使用状況を調査した。帰国後、コソボ、ボスニアでの活動を合わせた英語使用について、アンケートに答える形で各自レポートを提出させた。

4 結果

（表1）CASECの結果比較：左が1回目（Pre-test）、右が2回目（Post-test）、Sec1～4はそれぞれ250点

	学生	学年	Sec 1 (語彙)	Sec 2 (表現)	Sec 3 (聴取)	Sec 4 (書取)	Total 1000点
1	M.M.	4	117/165	144/145	184/207	124/137	629/654
2	N.N.	卒	117/117	142/145	177/179	142/154	578/595
3	H.S.	4	145/165	141/154	170/162	163/148	619/629
4	A.K.	3	96/133	126/154	119/98	121/108	462/493
5	K.M.	3	118/146	97/104	123/112	134/109	472/471
6	K.T.	3	120/155	109/109	114/115	110/118	453/497
	平均点		118.8/146.8	126.5/135.2	147.8/145.5	132.3/129.0	535.5/556.5

* CASEC=Computer Assessment System for English Communication（インターネットを使った英語コミュニケーション能力判定測定テスト）使用したテストの有意性については、誤差範囲が0.96という結果が報告されている。（教育測定研究所による測定）

（表2）参加以前の海外渡航背景：

	学生	学年	海外研修および旅行歴	海外ボランティア活動歴
1	M.M.	4	ゼミのフィリピン研修（2週間）	バルカン視察（2週間）、フェアトレード（国内NGO）
2	N.N.	卒	無し	コソボ（2週間）、東チモール（2週間）
3	H.S.	4	豪州短期留学（モナッシュ大学へ3カ月）	東チモール（2週間）
4	A.K.	3	中国（5日） カナダ（ホームステイ語学研修2ヶ月）	無し
5	K.M.	3	米国（1カ月）	無し
6	K.T.	3	タイ（3週間）	無し

（表3）英語による事前インタビュー結果：

	学生	学年	質問の理解度・内容	発音・流暢さ	使用語彙・文法・語法
1	M.M.	4	日常的な内容は問題なく、インターン参加の動機等についても主要な部分を的確に伝えることができる。	ゆっくりだが、自然な発音で流暢に話せる。	語彙の選択は適切だが、その用法や文法、構文に問題がある。
2	N.N.	卒	質問の意味を理解できるが、情報量、表現方法が不足して、曖昧にしか答えられない。	話すことに慣れていないため、言葉が繋がらない。	限られた語彙しか使えず、その用法や文法・構文にも誤りが目立つ。

	学生	学年	質問の理解度・内容	発音・流暢さ	使用語彙・文法・語法
3	H.S.	4	日常的な会話は問題がないが、活動内容の説明等は、概略しか伝えることができない。	日常的な話題においては流暢に話せる。	語彙の選択は適切だが、その用法や文法、構文にいくつかの誤りがある
4	A.K.	3	自己紹介程度の話はできるが、話の内容は概略さえ曖昧にしか伝えられない。	日常的な話題においては少し話せるが、話すことに慣れていないため、言葉がつかない。	限られた語彙しか使えず、その用法や文法、構文にも誤りが目立つ。
5	K.M.	3	日常的な会話は問題がないが、活動内容の説明等は、概略しか伝えることができない。	日常的な話題においては流暢に話せる。	語彙の選択は適切だが、その用法や文法、構文にいくつかの誤りがある。
6	K.T.	3	自己紹介程度の話はできるが、話の内容は概略さえ曖昧にしか伝えられない。	興味のある話題には加わることができるが、言葉がつかない。	限られた語彙しか使えず、その用法や文法、構文にも誤りが目立つ。

以上の結果から、参加者の英語力について、次のように言及できるとされる。a) CASEC の平均点が、参加前と後では21点の差がみられる。b) 旅行を含めた海外渡航歴の有無により、ある程度の英語力の差がみられる。c) 卒業生を除くと、3年生と4年生の差に注目できる。1人の学生を除いて、参加後の CASEC の平均点が高くなっていることから、今回のインターンシップとボランティア活動中の英語使用環境への時間が英語力に影響していると考えられる。特に語彙の項目が28点と大きく飛躍しているの理由は、英語を仕事および生活する手段として、自らが真剣に使用しなければならない状況の中から、意味を把握する推測力が増強されたのではないかとされる。bとcの理由としては、ボランティア活動歴の有無が関係しているのではないかと推測される。実際に活動に関わった時の経験が重要な動機づけとなり、英語学習に熱心に取り組むことによる結果と考えることができるかもしれない。今回は、サンプル数が少ないため仮説としてとらえるのは難しいが、ボランティア活動のような経験、すなわち身体と精神面においての体験に基づいた学習をすることが、英語学習成果にも大きな影響を与えることになると考えられまいだろうか。

参考として、国連等の国際的な機関への就職を考える英語力の目安、および米国、英国の国際関係の大学院へ進学するための英語力の目安は、次のとおりである。

国際的な機関への就職を考える英語力の目安

CASEC	TOEFL	TOEIC	英語検定	国連英検
900以上	650以上	900以上	1級	特A級

英語圏における国際関係の大学院へ進学するための英語力の目安（最低ライン）

CASEC	TOEFL	TOEIC	英語検定	国連英検
742以上	550以上	850以上	準1級	A級

これらの基準を参考にすると、調査対象学生1のように、UNDP のインターンの仕事をこなすには、少なくとも大学院へ進学するための英語力が要求されると考えられる。しかし、現実の国際学部の入

学者の CASEC 平均点数は、1000点満点中、2003年度：407点 2004年度：447点、短期留学参加学生の平均は、事前：503点 事後：581点である。この結果が示唆することは、国際協力の現場に学生を送るだすためには、英語力育成の抜本的改革抜きには考えられない。そのために、英語科目の少人数授業の徹底、授業内容の見直しの他、ゼミ単位での動機付けの指導が、不可欠であると思われる。

5 UNDPインターン学生活動内容と英語使用状況

UNDP の基金により立ち上げられた KYN (Kosovo Youth Network) が、今回のインターン生の活動拠点となった。KYN は、コソボに約100団体存在する若者を対象として活動する NGO をまとめる組織である。インターン生は、事務局のアシスタントとして仕事をする他、コソボにおける人権プロジェクトの会議に5回出席し、治安維持の調査、ミトロビツァでの会議の準備にかかわった。注目すべき仕事は7月以降に行った KYN のファンド・レイジング（活動資金開発活動）のプロジェクトである。主に日本の企業のホームページから資金援助をしている企業を調査、日本大使館を通して申請書を提出した。最後の数週間は、UNDP の日本人スタッフの伊藤氏のもとで小型武器回収プロジェクトに関する英語の論文を日本語に翻訳する作業も行った。毎日の会議にも出席したが、運営上のことには参加できないため、議論を聞くことが主である。インターン生は、仕事の中で最も時間を費やしたのは、英文を書くことであったと報告している。このような活動での英語使用の状況は以下のとおりである。

インターン生の英語使用状況

スキル別能力	会議のサポート	KYN内での仕事	仕事外
リーディング	会議書類に目を通す プログラムの確認	資料に目を通す スケジュール等の 連絡メモ／電子メール 論文翻訳	新聞 電子メール
リスニング	会議進行に関する 情報収集	スタッフからの指示を 受ける	ショッピング スタッフとの懇談
スピーキング	会議場での案内	スタッフとのやりとり、 電話の応対 報告	ショッピング スタッフとの懇談
ライティング	会議メモ作成	電子メールでの文書作成 報告書作成	電子メールでの報告 レポート作成

6 コソボ UNDP 側からのインターン生の英語力に関するフィードバック

実際にインターンとして仕事を遂行するには、今回のインターン生の英語コミュニケーション能力は、残念ながら十分ではなかったと思われる。また若さ故、経験も乏しく大きなプロジェクトを担うことは困難である。むしろ、フィールドプロジェクトで体験的な仕事をする方が、成果が現れるのではないだろうか。語学力（英語）は、3カ月の間に飛躍的に上達しているが、専門用語の知識にも乏しく、現地指導責任者が仕事を指示する上で、日本人スタッフに通訳を依頼することもしばしばあった。また、ローカルスタッフの英語とヨーロッパ各地から集まっているスタッフの英語を理解するためには、国際語として英語を理解するリスニングの訓練も必要と考えられる。送り出す大学側で、インターン生のための英語のプログラムを開発してほしいという要請もあった。インターン生のひと

りがレポートの中で次のように書いている。「事務的な会話はできたとしても、自分の主張を相手に伝えるとき、細かく深く伝えることができなければ、与えられた仕事以上に何かをする事はなかなかむずかしい」。このような語学のハンディを前提に考えると、デスクワークが中心の仕事よりも、難民キャンプ等でのフィールドワークにかかわるプログラムヘイインターンおよびボランティアの学生を送ることが望ましいのかもしれない。また、文教大生が同じところで働くのではなく、単独でローカルスタッフとともに働くことで、より責任をもつ行動がとれ、言葉の面でも訓練になると考えられる。

7 ボランティアズの活動内容と学生たちの英語力

コソボでは、コソボ人権センターのセミナー出席、難民キャンプ訪問、虐殺のあった村の訪問、ボスニアでは、UNDP 主催の民族融合推進青年キャンプへの出席が主たる活動であった。帰国後、以下の項目に関して、回答を自由に書いてもらったところ、全員が自分の英語力の不足を痛感し、帰国後英語を長期的な計画で学ぶ必要を感じていると答えている。質問項目は、以下のとおりである。

- 1) 今回の旅行中にどのくらい英語を理解でき、また話せたと思いますか。
- 2) 英語が理解できずに困ったことはありましたか。
- 3) コソボ滞在中、人権センターのセミナーは、どのくらい理解できたと思いますか。
- 4) 最後の英語でのプレゼンテーションは、満足のいくものでしたか。
- 5) サラエボ滞在中は、英語を使用する機会は、どんなときでしたか。
- 6) UNDP のキャンプは、どのような点が参加して良かったと思いますか。英語を使う機会はありましたか。
- 7) 英語を使った場面で、一番記憶に残っていることは何ですか。
- 8) もう一度、同じようなプログラムに参加するとすれば、英語の面でどのような準備をする必要があると思いますか。

コソボ人権セミナーでの活動中は、英語で話される内容についても、通訳なしではほとんど理解ができなかった。これは単にリスニング力の問題ではなく、スキーマ（背景知識）と語彙力不足によるものだと考えられる。日本の人権問題についてプレゼンテーションする機会が最後にあり、内容は時間をかけて準備をしたけれども、英語のデリバリーの面では困難であり、途中から通訳を介した。コソボ滞在中、虐殺のあった地域、難民キャンプを訪問する際も、アルバニア語またはセルビア語から英語への通訳がなされるため、現地（コソボ）の人の英語を聞く機会が多くあった。持参した文具などの物資を届けた際には、どのような形、だれからこれらを集めたかを説明し、是非コソボの子供たちのために使って欲しい旨を英語で伝えた。コソボ人権センター主催のセミナーと研修中には、アメリカ人の研修生を含むコソボの学生たち、およびスタッフと個人的に話す機会が多くあった。このように共に時間をすごすことで、日常的な会話には慣れてきたようである。しかし、セミナーで取り上げられたテーマに関して、自分の意見を十分に述べるができず、それぞれ非常に残念に感じている。ボスニアへ移動してからは、コソボで英語を使うことに慣れていたため、個人的なコミュニケーションにおいてはずいぶんと楽になったようである。スレブレニツァで参加した UNDP のキャンプにおいては、セルビア語が中心ではあったが、セルビア語から英語への通訳を介して理解し、英語ができるスタッフや学生たちとは、個人的にコミュニケーションが可能であった。最後には、大勢の学生の前で、英語で挨拶をする場面もあり、このような言語体験をすることにより、一層英語を学ぶ

ことへの意欲が高められていることが全員からうかがわれる。

8 国際協力に関する英語学習プログラム

国際学部では、ESP（=English for Specific Purpose）のひとつのクラスと課外の授業において、次のような授業を行っている。2003年後期には、語学選択科目のEAP（=English for Academic Purpose：2004年度からの科目名はESP）のひとつのクラスにおいて、国際協力に関するテキストを読み、ディスカッションを中心に行った。受講者はボランティア活動の経験者ではないが、国際協力に興味のある学生が多く参加した。もうひとつの授業は、過去に海外でのボランティア活動に実際にかかわった学生で、国際協力をテーマにテキストを読んでいきたい自主的な学習グループである。当然のことであるが、後者のグループの学習姿勢は前者とは比較にならないくらい積極的であった。

この英語科目で扱うテーマは、紛争、貧困、復興、再構築、開発、ジェンダー、ストリートチルドレン、平和教育等である。授業では、英語で自分の意見を述べることができるための構文練習、会話のターンテイク、社会、文化的な言語ルール、ディベート、プレゼンテーションの方法を学習する。重要なことは、英語テキストを大量に読むことにより、関心あるテーマについての語彙を増やすことである。将来的には、この授業のために国際学部が特に関心を持つテーマを扱う英文のテキストの作成が必要であると思われる。

その他、現地での情報を得るために必要とされる日常的な会話能力や、人間関係を築いていくためのいわゆる“small talk”（アイスブレイキング的なおしゃべり）は、基本的な語彙とローカル知識（共通の話題）があれば、現地で生活する間に上達が可能である。そのための基礎力と言葉の訓練の場として、国際学部の英語科目（CALL=Computer Assisted Language LearningとEIC=English for International Communication）での集中的な学習に期待がよせられる。このような会話能力は、性格的な要素が反映するため、全員がコミュニケーションになることは望むことはいかなるかもしれない。しかし、ある一定の期間、聞くことに集中していると、赤ちゃんのように、ある時突然言葉を操ることができるようになると言語理論的には考えられるので、継続的に長期にわたる英語学習と英語使用環境へのアクセスが大切である。時間がたっても話せないのは、インプットの量が不足している状態であるか、学習した知識が断片的で意味のある言語として発信できる状態ではないと考えられる。

9 おわりに

コソボ、ボスニアは、戦後の復興支援だけではなく、社会の再構築が学べる特殊な地域であり、今後もインターン、ボランティアチームを送ることは意義深い。それ故、国際学部から継続して学生を送り出すためにも、事前の語学力育成は大きな課題である。また開発教育の原点のとりえ方、「何かをしてあげる」のではなく、「共に生きる」意味を考えるためのボランティア活動の参加であることを、認識させていくことが必要であるように思われる。

同時に、文教大生の大学生活における意識改革の必要性を感じている。今日では、アルバイト、サークル活動などに時間をとられ、将来への投資と思われる勉強に時間を真剣に費やすことが学生の間で難しくなっている。進路を開拓するために、奨学金の獲得の機会を増やすなどの方法で、学生たちが自ら希望を実現するための学習を持続できるようなサポートをすることはできないだろうか。また手が届かないような夢を語るのではなく、具体的に、努力することで到達することのできる目標を示し、進路開拓するための動機付けを行うことが、これからの国際学部の教育に求められるひとつの役割ではないかと思われる。

参考文献

日本生涯学習総合研究所「CATの実用性の検証」

上智大学社会正義研究所「難民とNGO」

(国際ボランティア委員会委員・国際学部助教授 生田祐子)

Ⅲ 国際ボランティア活動の実態調査³

1 調査の主旨とプロセス

本調査は、文教大学における国際ボランティア活動の実態と、そこに関心を寄せ活動に参加する学生の状況を把握するために行われた。「国際協力」への関心が地球規模で拡大している現状をうけ、実際に国際ボランティアを経験しようとする学生が増え続けている。とりわけ本学では、学生が主体となって結成された「文教ボランティアズ」も2003年度には活動3年目をむかえ、活動経験者も総勢39名を数えるに至った⁴。よって、これまでの活動を参加者の視点から評価するにふさわしい時期となったと判断し、体験者へのアンケート調査を実施した。

調査で把握しようとしたのは、おおよそ以下の内容である。それは、①これまでの活動実績とその体験が学生におよぼした意義について、②学生が国際協力を行う際の諸問題について、③学生の意識ならびに大学の制度的な改善点について、④活動参加学生の意識(向上心)変化についてである。さらにこの結果から、今後のボランティア活動をますます活性化するための、有益な示唆を導出するのが目的である⁵。

調査票の作成にあたり、まず、アンケート調査作業部会が組織された。ボランティア委員会から中村・生田両先生がアドバイザーとなり、作業部会の責任者に筆者が、学生代表の取りまとめ役として鹿谷・一丸両君が選出された。はじめに調査項目のリストアップを行い、それを作業部会で検討して原案を作り、再度校正・確認した後に印刷・発送・回収・集計という手順をとった。これら一連の作業のほぼすべては、筆者の指示のもと、2人の学生代表が担当した。

以下、順に紹介するのは、その回答をデータ化したものである。まず、次節では回答者の基本属性(性別、大学入学年度、参加した活動)を要約し、つづく3節では回答の単純集計結果を示した。最後に4節で、これら調査結果が示すいくつかの論点を簡単に指摘し、まとめとした。

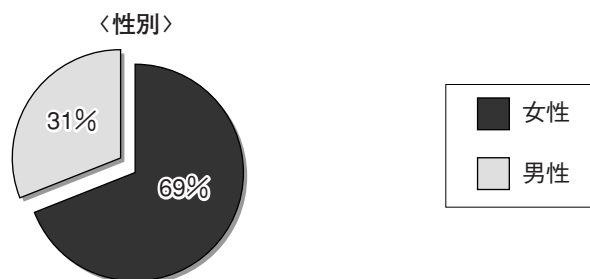
2 回答者の属性

本調査における回収票は32票であった。39人を対象とした配布のため、回収率は82%である。はじめにその男女比をみると、女性が69%、男性が31%と女性の回答者が多かった(図表1)。仮に、回収できなかった7人全員が男性だったとしても、女性の参加経験者が多いという結果である。

³ 本稿作成にあたり、2003年度文教大学4年の鹿谷耕平、一丸静香両名の多大な協力を得たことを記しておく。

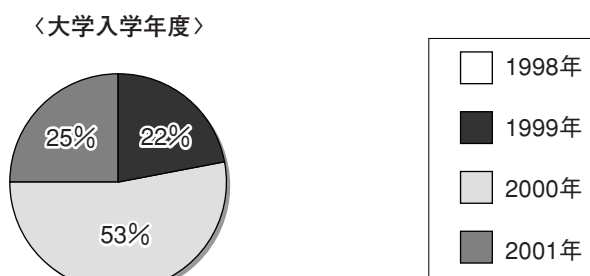
⁴ 複数のボランティアに参加した学生がいるため、のべ人数ではさらに多い。

⁵ 本報告は、活動を改善するための指摘ができるまで、十分に踏み込んだ検討はしていない。その理由に、回収サンプル数が少なく数的処理が十分になじまないこと、よって後日、回収票をもとに回答者へのヒアリングを行うなど、質的な方法を採用すべきではないかとの判断がなされたことがあげられる。これら問題をクリアーし、本格的な検討は別稿で行うこととしたい。また、調査速報は「文教ボランティアズ報告書2003年度版」にも掲載された。



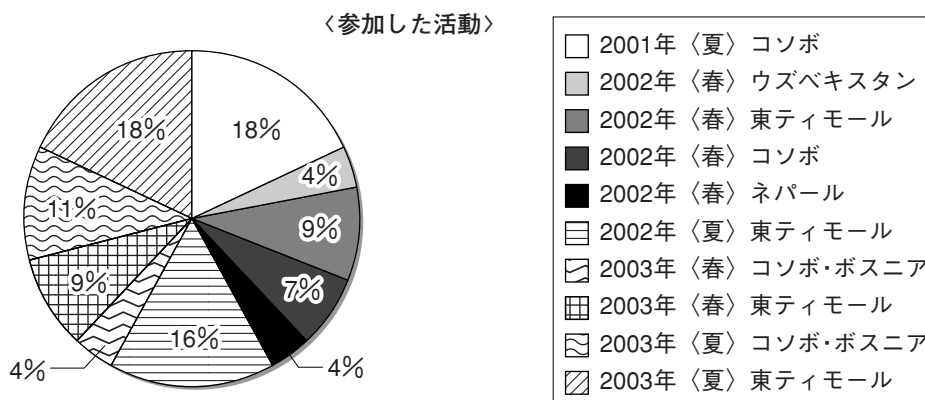
図表 1

次に、回答者の大学入学年度を見てみると、2000年度入学の学生が53%ともっとも多かった（図表2）。中村恭一ゼミに在籍する学生数（2003年度の4年生）が多いためでもあるが、ゼミを中心とするボランティア活動が活発になってきた年代とも考えられる。また、2000年度は、本学新カリキュラムの開始年でもあった。推論ではあるが、国際関係学科・政治経済協力コースが設置されたことで、学生にとっても入学前後から国際協力が意識され、参加への動機付けとなったのかもしれない。



図表 2

図表3は、参加した時期と活動地域を示したものである。文教ボランティアズの活動は、コソボでの支援活動（2001年夏）に始まり、調査時点までに合計10回が実施されている。現在では、コソボと東ティモールの2地域を中心とした、継続的な活動が行われている。



図表 3

なお、東ティモールでは、学生によるプロジェクトも立ち上がっている。独立後間もない東ティモールの現地ニーズを的確に把握しつつ、どういった協力が望ましいか、学生にどのような対応ができるかを模索・検討する場となっている。もはや単なる体験ではなくなっているところが、活動の充実を示している。

3 調査結果の概要

以下、アンケート原票の記述をもとに、単純集計結果を示す。なお、自由記入欄については、回答に含まれるキーワードをあらかじめ定めておき、それを全票からカウントして回答者数（32）で割るという方法をとった。したがって、複数回答の設問も含め、割合の合計が100%をこえるものがある。回答者の記述上のクセを排除できないのは問題であるが、参加者の体験したものがどのように表現されているかを見ることにより、その出現割合が多いほど、特定の経験にたいして一定の認識が共有されている可能性が高いことを把握でき興味深い。

I 参加動機と周囲の反応について

問1. 大学での活動に参加する前に、ボランティア経験はありましたか。

⇒ [Yes : 15 (46.9%) / No : 17 (53.1%)]

【<Yes>と答えた方】活動回数：国内＝〔平均1.14〕回、海外＝〔平均0.06〕回

問2. 何をきっかけにボランティアに興味を持つようになりましたか。自由にお書きください。

中村先生 = 12 (37.5%)	日常の関心 = 12 (37.5%)	先輩・友人 = 11 (34.4%)
その他 = 4 (12.5%)	なし = 2 (6.3%)	

問3. どのようにしてこの活動を知りましたか。（複数回答可）

1 : 授業 = 15 (46.9%)	2 : ゼミ = 16 (50%)
3 : チラシ／ビラ = 5 (15.6%)	4 : 知人 = 8 (25%)
5 : 先輩 = 1 (3.1%)	6 : その他 = 1 (3.1%)

問4. なぜ活動に参加しようと思いましたか。（複数回答可）

1 : その地域に興味があったから = 16 (50%)
2 : 活動内容に興味があったから = 16 (50%)
3 : 何かやりたかったから = 13 (40.6%)
4 : 友達が参加したから = 0 (0%)
5 : なんとなく = 0 (0%)
6 : その他 = 2 (6.3%)

問5. 活動をすることを知った家族の反応はどのようなものでしたか。

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1：かなり反対した＝3（9.4%） | 2：反対した＝4（12.5%） |
| 3：しぶしぶ賛成してくれた＝16（50%） | |
| 4：快く賛成してくれた＝8（25%） | 5：反応なし＝1（3.1%） |

問6. 活動をすることを知った親しい友人の反応はどのようなものでしたか。

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1：かなり心配した＝3（9.4%） | 2：心配した＝8（25%） |
| 3：しぶしぶ応援してくれた＝3（9.4%） | |
| 4：快く応援してくれた＝19（59.4%） | 5：反応なし＝0（0%） |

Ⅱ 計画・資金調達プロセスについて

問7. 出発前に不安に感じていたことは何ですか。自由にお書きください。

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 金銭面＝8（25.0%） | コミュニケーション能力＝58（181.3%） |
| ボランティアについての理解＝13（40.6%） | 現地の状況＝20（62.5%） |
| その他＝1（3.1%） | 特になし＝2（6.3%） |

問8. 事前勉強は十分しましたか。

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1：十分した＝7（21.9%） | 2：まあまあした＝21（65.6%） |
| 3：あまりしなかった＝4（12.5%） | 4：まったくしなかった＝0（0%） |

問9. 『資金調達』についてお答えください（問9～12に共通）。

活動に参加するための費用はいくらでしたか

⇒ 約〔平均259,166.7〕円（1回あたり）

問10. その費用のうち、家族の援助はどのくらいでしたか。

- | | |
|----------------|------------------|
| 1：100%＝2（6.3%） | 2：75%程度＝4（12.5%） |
| 3：50%程度＝8（25%） | 4：25%程度＝9（28.1%） |
| 5：0%＝7（21.9%） | |

問11. その費用のうち、自己調達はどのくらいですか。

- | | |
|------------------|------------------|
| 1：100%＝7（21.9%） | 2：75%程度＝9（28.1%） |
| 3：50%程度＝9（28.1%） | 4：25%程度＝5（15.6%） |
| 5：0%＝1（3.1%） | |

問12. 自己調達方法は何でしたか。（複数解答可）

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1：アルバイト＝25（78.1%） | 2：貯金を崩した＝12（37.5%） |
| 3：借金をした＝6（18.8%） | 4：その他＝5（15.6%） |

【問12で「1：アルバイト」と答えた方】

付問1. 資金調達のために、何かアルバイトの変更をしましたか。(複数回答可)

- 1：出勤時間を増やした=19 (59.4%)
- 2：割のいいアルバイトに変えた=4 (12.5%)
- 3：アルバイトの種類を増やした=6 (18.8%)
- 4：特に変化なし=7 (21.9%)
- 5：その他=0 (0%)

付問2. アルバイトと学校(勉強)との両立はできましたか。

- 1：できた=9 (28.1%)
- 2：まあまあできた=8 (25%)
- 3：あまりできなかった=8 (25%)
- 4：できなかった=3 (9.4%)

問13. 学生がこのような活動をしていく上で、学校からの資金的な援助があったほうがよいと思いますか。

[Yes=30 (93.8%) / No=1 (3.1%)]

Ⅲ 活動体験について

問14. 活動を通じて感激したこと、うれしかったことは何ですか。自由にお書きください。

現地の人との交流=44 (137.5%)	日本の再確認=3 (9.4%)
勉強のチャンス=9 (28.1%)	その他=3 (9.4%)

問15. ギャップを感じたり、衝撃を受けたりしたことはありましたか。自由にお書きください。

紛争の傷跡=17 (53.1%)	社会・文化の違い=17 (53.1%)	貧困=7 (21.9%)
自身の未熟さ=3 (9.4%)	援助の矛盾=3 (9.4%)	その他=9 (28.1%)

問16. また、(問15に関して) その思いにどのような対処をしましたか。
(複数回答可)

- 1：現地国際スタッフに伺った=14 (43.8%)
- 2：他の参加者と話をした=26 (81.3%)
- 3：先生に伺った=8 (25%)
- 4：現地の人に伺った=0 (0%)
- 5：自分自身で処理した=15 (46.9%)
- 6：その他=3 (9.4%)

問17. 困難に感じたことはありましたか。自由にお書きください。

コミュニケーション=22 (68.8%)	インフラの不備=12 (37.5%)
自身の未熟さ=5 (15.6%)	社会・文化の違い=2 (6.3%)
その他=2 (6.3%)	特になし=5 (15.6%)

問18. また、(問17に関して) どのように対処しましたか。自由にお書きください。

コミュニケーション = 17 (53.1%)	現地で勉強 = 11 (34.4%)
自分の努力 = 11 (34.4%)	仲間の協力 = 2 (6.3%)
その他 = 4 (12.5%)	とくになし = 5 (15.6%)

問19. 現地の人々との交流はうまくできましたか。

- 1 : 良くできた = 11 (34.4%) 2 : まあまあできた = 17 (53.1%)
 3 : あまりできなかった = 3 (9.4%) 4 : できなかった = 0 (0%)

問20. 現地で怪我や病気をしましたか。

[Yes = 15 (46.9%) / No = 16 (50%)]

【問20で<Yes>と答えた方】

付問. どのような症状でどのような対処をしましたか。

下痢 = 6 (18.8%)	発熱 = 5 (15.6%)	カゼ = 4 (12.5%)
軽い怪我 = 3 (9.4%)	その他 = 8 (25.0%)	病気・怪我はなし = 15 (46.9%)
対処→薬を使う = 9 (45.0%)	自身の体調管理 = 4 (20.0%)	
その他 = 7 (35.0%)		

問21. 体調管理で気を付けたことは何ですか。

飲食物の注意 = 13 (40.6%)	よく食べる = 6 (18.8%)
睡眠をとる = 6 (18.8%)	防虫薬の利用 = 6 (18.8%)
体温調節 = 5 (15.6%)	無理をしない = 2 (6.3%)
水分補給 = 2 (6.3%)	特になし = 4 (12.5%) その他 = 4 (12.5%)

IV 参加後について

問22. 図書館に行く回数は増えましたか。

- 1 : 増えた = 9 (28.1%) 2 : まあまあ増えた = 11 (34.4%)
 3 : 少々減った = 0 (0%) 4 : 減った = 0 (0%)
 5 : 変化なし = 12 (37.5%)

問23. 授業への意欲は増しましたか。

- 1 : 増した = 15 (46.9%) 2 : まあまあ増した = 8 (25%)
 3 : 少々減った = 0 (0%) 4 : 減った = 0 (0%)
 5 : 変化なし = 3 (9.4%) 6 : 授業による = 6 (18.8%)

問24. 語学（英語）の勉強時間は増えましたか。

- 1：増えた＝7（21.9%） 2：まあまあ増えた＝15（46.9%）
 3：少々減った＝3（9.4%） 4：減った＝1（3.1%）
 5：変化なし＝4（12.5%）

問25. 学生にできるボランティア活動とはどのようなことでしたか。自由にお書きください。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| （ 現地の人との交流＝17（53.1%） | 体験による学習＝11（34.4%） |
| （ 体を使った援助＝10（31.3%） | 楽しさを伝える＝4（12.5%） |
| （ 物資の支援＝3（9.4%） | その他＝2（6.3%） |

問26. 活動での一番の反省点はどのようなことでしたか。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| （ 語学力不足＝10（31.3%） | 自身の未熟さ＝10（31.3%） |
| （ 知識不足＝8（25.0%） | コミュニケーション不足＝7（21.9%） |
| （ 特になし＝2（6.3%） | その他＝3（9.4%） |

問27. また、（問26に関しての）反省点を補うためにどのようなことが必要だとお考えですか。

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| （ 自身の成熟＝10（31.3%） | 社会情勢の勉強＝9（28.1%） |
| （ コミュニケーション＝5（15.6%） | 事前の準備＝5（15.6%） |
| （ 語学＝3（9.4%） | 特になし＝2（6.3%） その他＝6（18.8%） |

問28. このような活動をする際、ぜひ身につけておきたい知識や技術はありますか。（複数回答可）

- 1：国際運転免許＝19（59.4%） 2：日本語教員免許＝7（21.9%）
 3：その他資格＝4（12.5%）
 4：現地の一般事情＝26（81.3%） 5：日本の一般事情＝23（71.9%）
 6：その他知識＝12（37.5%）

問29. 活動後（現在）も現地とのつながりを持つことができますか。

- 〔 Yes＝17（53.1%） / No＝14（43.8%）〕

問30. 学生のうちに海外でボランティアを行い、変化した点はどのようなことですか。（複数回答可）

- 1：読書量が増えた＝8（25%）
 2：国際ニュースに関心を持つようになった＝24（75%）
 3：環境への配慮が増した＝11（34.4%）
 4：外国人への感覚がかわった＝17（53.1%）
 5：無駄使いをしなくなった＝5（15.6%）
 6：海外を身近に感じるようになった＝22（68.8%）
 7：その他＝7（21.9%）

問31. 日本で得られる情報だけでなく、実際に出向いて分かったことは何ですか。

現地の状況 = 29 (90.6%)	紛争による社会問題 = 11 (34.4%)
国際援助の実態 = 6 (18.8%)	かたよったマスコミ報道 = 5 (15.6%)
インフラの不備 = 2 (6.3%)	その他 = 1 (3.1%)

問32. 計画段階と実行段階の差はありましたか。

- 1 : かなりあった = 14 (43.8%) 2 : 多少あった = 14 (43.8%)
 3 : あまりなかった = 3 (9.4%) 4 : まったくなかった = 0 (0%)

問33. (問32に関して) その差とはどのようなことですか。

現地の人との認識の差 = 11 (37.9%)	活動の難しさ = 7 (24.1%)	
交通のトラブル = 3 (10.3%)	物資不足 = 2 (6.9%)	その他 = 6 (20.7%)

問34. 活動に参加して、国際協力関連の仕事につきたいという気持ちについて、出発前と帰国後の変化はありましたか。もっともあてはまる項目1つに○をつけて下さい。

- 1 : 出発前も帰国後も、国際協力に関連する仕事をしたいと考えている。 = 15 (46.9%)
 2 : 出発前は国際協力に関連する仕事をしたいと考えていたが、帰国後は考えなくなった。 = 3 (9.4%)
 3 : 出発前は国際協力に関連する仕事をしたいとは考えていなかったが、帰国後は考えるようになった。 = 7 (21.9%)
 4 : 出発前も帰国後も、国際協力に関連する仕事をしたいとは考えていない。 = 1 (3.1%)
 5 : 判断はつかなかった。 = 6 (18.8%)

問35. 就職活動で、国際協力関連の機関や会社にアプローチはしましたか（するつもりですか）。

[Yes = 21 (65.6%) / No = 11 (34.4%)]

【問35に<Yes>と答えた方】

付問. 具体的にどのようなことをしましたか（するつもりですか）。（複数回答可）

- 1 : 資料請求した（もしくは予定） = 15 (46.9%)
 2 : 会社訪問した（もしくは予定） = 8 (25%)
 3 : 選考を受けた（もしくは予定） = 8 (25%)
 4 : 就職した（もしくは予定） = 3 (9.4%)
 5 : その他 = 3 (9.4%)

問36. 国際協力に関する仕事に就きたいと考えている学生にとって、国際ボランティア活動の機会は十分意義のあるものでしたか。

- 1 : そう思う = 27 (84.4%) 2 : ややそう思う = 3 (9.4%)
 3 : あまりそう思わない = 1 (3.1%) 4 : まったくそう思わない = 0 (0%)
 5 : どちらとも言えない = 1 (3.1%)

問37. このような活動の経験をこれからどう生かしていきたいですか。

自身の成長 = 14 (43.8%)	進路決定 = 8 (25.0%)	勉強 = 3 (9.4%)
人とのつながり = 3 (9.4%)	次の活動 = 3 (9.4%)	
後輩へのアドバイス = 3 (9.4%)	その他 = 1 (3.1%)	

問38. このような活動に参加したことは、あなたにどのような影響をもたらしましたか。

人間的な成長 = 12 (38%)	将来へのヒント = 9 (28%)	価値観 = 9 (28%)
視野の拡大 = 6 (19%)	他人への配慮 = 5 (16%)	その他 = 3 (9%)

問39. 国際協力関連の仕事を選ばなくともこの先、ボランティアなどで国際協力に関わりたいと考えていますか。

1 : 強く考えている = 23 (71.9%)	2 : まあまあ考えている = 9 (28.1%)
3 : あまり考えていない = 0 (0%)	4 : まったく考えていない = 0 (0%)

問40. このような活動を今後、友人や後輩に勧めていきたいですか。

[Yes = 27 (84.4%) / No = 4 (12.5%)]

問41. 活動に関するご要望があれば、自由にお書きください。

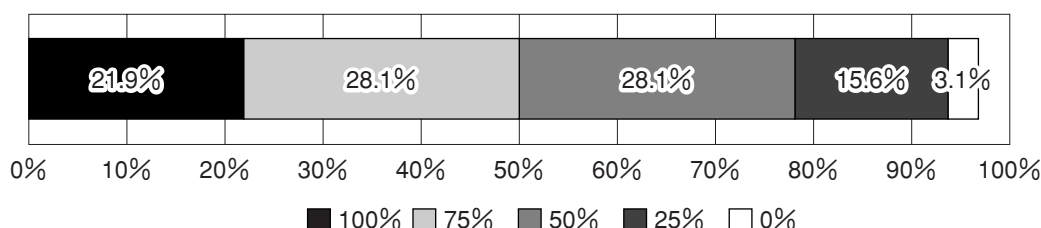
参加学生へのフォロー、	金銭的支援、	活動がいつまでも続くように、
記録・分析をしっかりと、	活動場所との深い関係づくり、	
国際協力分野を仕事とする学生の輩出を、		
情報提供を継続的に行ってほしい	など	

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

4 要約

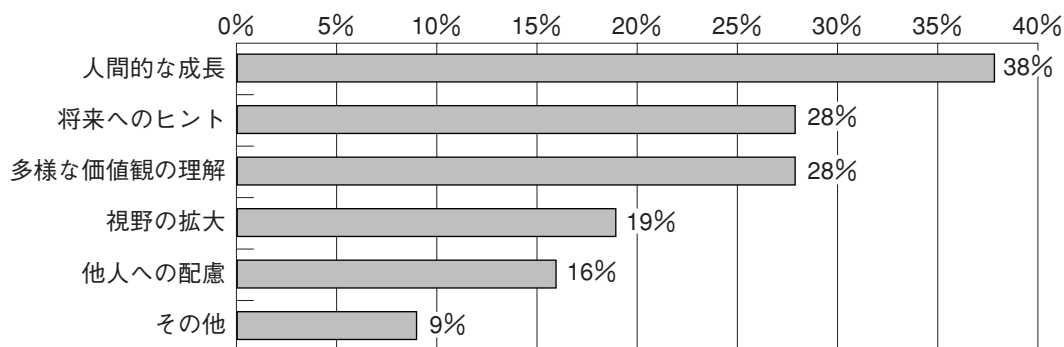
上に紹介したアンケート結果（単純集計）から、文教ボランティアズの成長のための指摘をしておこう。

- ① 海外ボランティア経験のほとんどない学生にとって、文教大学のなかでの活動紹介が、国際協力の機会を提供していると考えられる。とりわけ中村先生の講義やゼミ、経験者の活動紹介によって、情報が伝達されている。学内の人的なつながりが、参加に影響しているようである。よって、今後もボランティアズから発信される様々な情報が、多くの学生の参加を促すと予想される。
- ② 学生の活動参加にかんしては、経済面での課題が残されている。平均でおよそ26万円の費用のうち（問9）、回答者の約8割はその50%以上を、さらに約半数は75%以上を自己負担していた（問11）。費用の調達方法は、大半がアルバイトとなっており、その約7割の学生が時間や種類の点でアルバイトを増やしたと答えている（問12）。学業とアルバイトの両立でも4割は「（あまり）できなかった」としており、問13に見られるように、資金的な援助を望む声が強いのうなずける。



図表4 資金の自己調達の割合（問11） N=31

- ③ 活動参加後の変化では、向学心が培われたと判断できる回答が多く寄せられている。図書館利用回数が「(まあまあ) 増えた」とする割合は6割をこえ（問22）、授業への意欲でも7割以上が「(まあまあ) 増した」と答えている。語学についても同様に、7割以上は勉強時間が「(まあまあ) 増えた」と回答している。体験型教育は、その活動前後にも、学生に対する学習の機会を提供しているといえよう。同時に、一個人としての成長があったとの回答もよせられている（問38）。



図表5 活動参加による自身への影響（問38）
（回答に重複あり）

- ④ 卒業後の進路決定においても、実際の活動が良い判断材料となっているようである。問36にみられるように、この国際協力活動が職業選択上「意義がある」と感じられた割合は9割をこえている。体験後、国際協力関連の職業を希望する学生の割合も、就職活動としてこれらの組織に接触をとる学生も多い。今後、このような希望をもつ学生に、卒業後の進路としてどのような場所が案内できるか、学生・教員を含む大学全体での課題が突きつけられている。
- ⑤ 現地での不可欠な要素としては、コミュニケーション能力が指摘される。このなかには語学の知識も当然含まれるだろうが、他者とコミュニケーションをとる際に必要な世界情勢の知識、日本にたいする認識、当該国の社会や文化の把握などが要求されたと感じた回答者が多いようである。コミュニケーションは、当人の「言いたいこと」や「伝えたいこと」がなければ成立が難しいと感じられたなら、むしろ幸いなことであろう。おそらく今後も、語学をはじめ、現状把握・社会の認識（フレームワーク）・問題提起といった能力を向上させる指導は、国際学部にと託された教育上の役割である。

上に述べた諸点は、経験者の貴重な意見によって析出された。これらをふまえつつ文教ボランティアが活動をしていくとき、さらなる発展が期待される。自己評価の時期とはいえ、まだ3年である。のびしろは大きい。活動に実際に携わった先輩が、ボランティアズの今後について、継続・記録と分析・深い関係づくり・国際協力分野への積極的な進出を願っている。まずはその志を受け継ぐことを通じて、学生としての国際協力活動の研究を始めてもいいのだろう。つづく者によって、さらに経験が蓄積される。そのことが実感できる。

謝辞

本調査の実施にあたり、文教大学でのボランティア経験者から多大な協力を得た。本来ならば個別にお礼を申し上げるべきであろうが、本報告文ならびに調査結果を今後のボランティア活動推進のために有効活用することを約束して、お礼にかえさえていただきたい。

(国際ボランティア委員会委員・国際学部専任講師 山田修嗣)

